

日本産テンナンショウ属の再検討 (4)**

ヒロハテンナンショウ群とシコクヒロハテンナンショウ群

芹 沢 俊 介*

Shunsuke SERIZAWA*: Studies on the genus *Arisaema* in Japan (4)**
Arisaema amurense group and *A. longipedunculatum* group

ヒロハテンナンショウ *A. amurense* var. *robustum* は、5小葉からなる1枚の葉と短い花茎で特徴づけられるテンナンショウ類の一種である。この植物は本州中北部の日本海側の山地にはやや普通に見られ、中井 (1935a, b) によって記載されたアシウテンナンショウ *A. ovale* やサドテンナンショウ *A. sadoense* も同じ系統のものである。堀田 (1974) はこの類の地理的な分布と変異を要約し、「朝鮮半島から中国大陆東北部にかけてはやや小形で花茎の長いアムールテンナンショウが、朝鮮半島中南部から九州北部、山陰、中部や東北地方の日本海側、さらに北上してサハリン南部までヒロハテンナンショウが分布している。近畿地方北部から中部地方西北部には仏焰苞が紫黒色で大形になるアシウテンナンショウが、また佐渡島には小葉がしばしば7枚以上になるサドテンナンショウが区別されることもある。」と述べた。

一方、大橋 (1963) は四国の山地と山梨県三ツ峠産の標本に基づき、全体に小形で花茎が長いことを特徴として、シコクヒロハテンナンショウ *A. robustum* var. *shikoku-montanum* を記載した。堀田 (1966) はこの植物がヒロハテンナンショウに近縁であるとしながらも、大橋がとりあげた特徴に加えて染色体数が $2n=28$ でヒロハテンナンショウの $2n=52$ とは異なること、雄花の葯室が融合していることを指摘して別種と考え、*A. longipedunculatum* という学名を提唱した。

ところが、最近各地を歩いているうちに、三ツ峠のほかにも本州中部や九州の太平洋側の山地に、ヒロハテンナンショウやシコクヒロハテンナンショウの類が点々と生育していることが判明してきた。これらの資料をまとめて表1の1~12に示す。表からも明らかなように、これらの集団はその形態や染色体数に関して非常に多様である。また、本州中部の飛騨山脈に雄花の葯室が融合する集団 (表1の13~15) があることも判明した。そこで、今回はこれらの資料をもとに、既知の分布域からの資料も加えて、日本のヒロハテンナンショウ、シコクヒロハテンナンショウ群の分類を再検討したい。本論文をまとめるにあたり、資料1, 8, 9, 10, 12の染色体数を調べてくれた数井教隆氏、九州産の資料の採集について大変お世話になった南谷忠志氏と、所蔵標本の検討を許された京都大学理学部 (KYO)、東京大学理学部 (TI)、同農学部

* 愛知教育大学生物学教室 Department of Biology, Aichi Kyoiku University, Kariya-shi, Aichi 448.

** 植物研究雑誌 56: 90~96 (1981) より続く。

表1 本州太平洋側, 九州中南部および飛騨山脈産の主要資料* (長さの単位は mm)

番号	産地	資料数	花茎の長さ	仏 焰			苞		葯		葉鞘・葉柄	小葉の形 ¹⁾	葉緑の鋸齒	染色体数
				色	筒部の長さ	舷部の長さ	筒部の隆起	口辺の開出	色	融合度				
1	三ツ峠	11	60-110	緑・淡紫	30-40	40-55	-	+	黄白	+	<	2.5-3.3	+	28
2	安倍峠A	38	20-130	緑	35-55	50-110	+	+	紫	-	>	2.4-4.1	-	26
3	安倍峠B	11	50-115	緑	20-30	40-50	-	-	黄白	+	≧	2.1-3.7	+・-	—
4	井川	4 ²⁾	75-130	緑	25-35	40-60	-	+	紫	+	<	2.1-4.0	+・-	—
5	駒ヶ根	3	20-50	淡紫	45-55	80-90	+	++	紫	-	>	2.5-3.0	-	—
6	茶臼山	4	40-50	緑	45-50	60-85	+	+	紫	-	>	3.6-4.0	-	39
7	藤原岳	6	10-60	緑	30-50	45-95	+	+	紫	-	≧	2.3-3.5	-	—
8	大崩山	7	55-115	緑	25-45	45-75	-	+	黄白	+	<	2.1-2.8	+	56
9	鰐塚山	13	10-40	緑	40-60	65-105	-	++	紫	-	>	2.4-3.8	+・-	28
10	霧島山 ³⁾	2	85-95	緑	30	50-55	-	+	黄白	+	÷	2.1	+・-	28
11	稻尾岳 ³⁾	1 ²⁾	40	緑	55	50	-	++	— ⁴⁾	— ⁴⁾	>	3.5	-	28
12	屋久島	23	70-320	緑	30-55	40-75	-	+	黄白	+	≦	1.9-2.9	-	28
13	穂高岳沢	19	10-30	紫	35-50	45-70	+	+	紫	±	≧	1.8-2.5	-	—
14	針ノ木峠	15	20-80	紫 ⁵⁾	35-55	45-75	+	+	紫	± ⁵⁾	÷	1.7-3.0	-	—
15	白馬岳	26	10-50	紫 ⁵⁾	30-55	45-75	+	+	紫	+ ⁵⁾	≧	1.5-3.0	-	52

1) 中央小葉の長さ/同・幅 2) 植栽品 3) 南谷忠志氏採集 4) 雌株のため不明 5) 少数の例外個体を含む

* 標本は愛知教育大学生物学教室 (AICHI) に保管されている。

(TOFO), 国立科学博物館 (TNS), 東北大学理学部 (TUS) の各標本室の皆様深く感謝いたします。

種・変種の検索表

1. 仏焰苞筒部には明瞭な縦の隆起条がある。染色体の基本数は13。(ヒロハテンナンショウ群)
 2. 仏焰苞舷部は五角状長卵形, 紫色で先端まで多数の縦白条がある。筒部口辺はやや広く開出する。花序附属体は太い円柱状で, 先端はやや頭状になる。
..... *A. amurense* var. *inaense*
 2. 仏焰苞舷部は卵形, 筒部口辺は狭く開出する。
 3. 仏焰苞は紫色で大形, 花序附属体は棍棒状。..... *A. amurense* var. *ovale*
 3. 仏焰苞は緑色または紫色で通常中形, 花序附属体は円柱状。
..... *A. amurense* var. *robustum*
1. 仏焰苞筒部に隆起条はない。染色体の基本数は14。(シコクヒロハテンナンショウ群)
 2. 花茎は長く, 葉鞘内の部分を除いて5~32cm, 雄花の葯は融合する。
 3. 花は葉面より低い位置につき, 仏焰苞は小さい。本州, 四国, 九州本土産。
..... *A. longipedunculatum* var. *longipedunculatum*
 3. 花は葉面より高い位置につき, 仏焰苞はやや大きい。屋久島産。
..... *A. longipedunculatum* var. *yakumontanum*
 2. 花茎は短く, 葉鞘内の部分を除いて1~4cm, 雄花の葯は融合しない。
..... *A. minamitanii*

I. ヒロハテンナンショウ群

1. *Arisaema amurense* MAXIM. Prim. Fl. Amur. 264 (1859).

Var. **robustum** ENGLER in DC. Monogr. Phan. 2: 550 (1879), Pfl.-reich 73: 204 (1920).—*Arisaema robustum* NAKAI, Bot. Mag. Tokyo 43: 531 (1929); F. MAEKAWA, Ic. Pl. As. Or. 1: 52, t. 25 (1936); OHASHI, Sci. Rep. Tohoku Univ. IV, 29: 432 (1963).—*Arisaema amurense* subsp. *robustum* OHASHI et J. MURATA, Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo III, 12: 292 (1980).—*Arisaema amurense* form. *integrifolium* MAKINO, Bot. Mag. Tokyo 15: 131 (1901).—*Arisaema robustum* var. *sachalinense* MIYABE et KUDO, Journ. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 26: 282 (1932).—*Arisaema sadoense* NAKAI, Bot. Mag. Tokyo 49: 584 (1935).—*Arisaema robustum* var. *abense* SUGIMOTO, Fl. Shizuoka 486 (1967).—*Arisaema robustum* var. *furusei* SUGIMOTO, Keys Herb. Pl. Jap. 2: 564 (1973).

Hab. Hokkaido, Honshu (excl. southern Kanto and most parts of Kinki) and northern Kyushu.

Var. **ovale** (NAKAI) OHASHI et J. MURATA, Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo III, 12: 292 (1980), ut *A. amurense* subsp. *robustum* var. *ovale*.—*Arisaema ovale* NAKAI, Bot. Mag. Tokyo 49: 423 (1935), Ic. Pl. As. Or. 1: 70, t. 32 (1936); KITAMURA, Acta Phytotax. Geobot. 10: 191 (1941).—*Arisaema robustum* var. *ovale* KITAMURA, Acta Phytotax. Geobot. 22: 73 (1976).

Hab. Honshu (Toyama, Ishikawa, Fukui, Shiga and Kyoto).

Var. **inaense** SERIZAWA, var. nov.

A var. *robusto* lamina spathae quinquangulato-ovata purpurea albo-striata, tubo spathae ore subauriculato, appendice spadiceis cylindrica apice subcapitata 7–9 mm diametro differt.

Hab. Honshu. Pref. Nagano: near Shirabi-daira, E. foot of Mt. Kiso-komagatake, Komagane-shi, alt. ca. 1600 m (*S. Serizawa* 29715 June 8, 1979 AICH—holotype, fig. 2); *ibid.* (*S. Serizawa* 29714, 29716 AICH).

ヒロハテンナンショウ *A. amurense* var. *robustum* は、この群の中では最も分布域が広い。葉は通常1枚、小葉は5枚のことが多いが、7枚のものもある。葉縁は全縁、白斑はない。葉軸は短く、長くても2 cm くらい、個体によってはごく短くなり、小葉がほとんど放射状につくこともある。中央小葉は有柄または無柄、通常内側の側小葉より小さい。外側の側小葉は比較的大きく、しばしば内側のものと同大である。葉鞘部（偽茎）は葉柄全長の1/2~3/4を占め、口辺は開出して多くの場合波状になる。花茎は葉鞘の中にある部分を除くと短く、通常1–7 cm である。仏焰苞は緑色のことが多いが、淡紫色や紫色のものもあり、筒部は長さ3.5–6 cm で、脈の部分が顕著に隆起する。この隆起条は、他の日本産テンナンショウ類には見られない特徴である。筒部口辺は狭く開出する。舷部は卵形で光沢があり、長さ4–9 cm、先端は鋭頭またはやや鋭尖頭である。雄花の葯は通常紫色で融合しない。花序附属体は円柱形、先端で径2–7 mm あり。球茎はよく子球をつける。染色体数は $2n=52$ である。北海道、本州（南関東と近畿地方の大部分を除く）および九州北部に分布し、主としてブナ帯の林内に生ずる。開花期は標高によって異なるが、5月中旬~7月上旬である。

アムールテンナンショウ var. *amurense* は、堀田 (1974) も述べているように朝鮮半島から中国大陆東北部にかけて分布しており、花茎が長く仏焰苞は小さい。葉縁には鋸歯の出るものもある。中井 (1929) はこの両者を別種として取り扱った。しかし、朝鮮半島産の標本を見ると、アムールテンナンショウとヒロハテンナンショウの間には移行的な中間形があり、はっきり区別できない。分布域の差を考慮しても、変種としての扱いが妥当である。

サドテンナンショウ *A. sadoense* は、小葉が7枚であること、偽茎と葉柄が帯紫色であること、花序附属体がやや太いことなどの特徴でヒロハテンナンショウから区別された種類である。しかし、小葉が7枚の個体は佐渡でも5小葉の個体にまじって散発的に見られるにすぎず、分

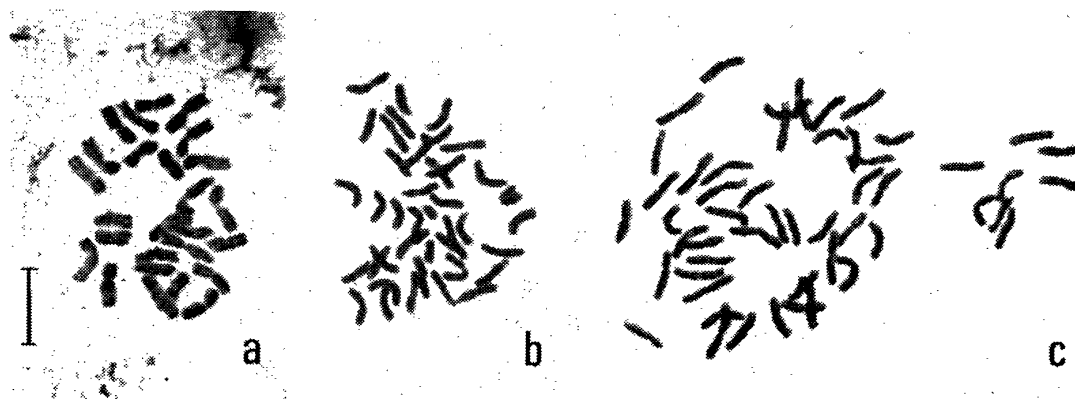


Fig. 1. Chromosomes of *Arisaema amurense* group.

a: Abe-toge, b: Mt. Chausu-yama, c: Mt. Shirouma-dake. (—| 10 μ m).

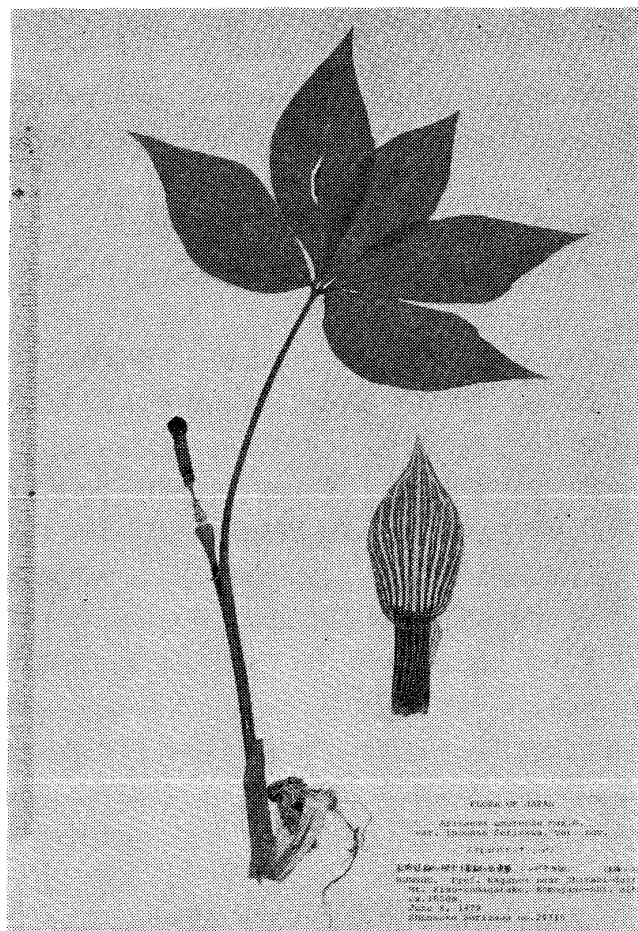


Fig. 2. *Arisaema amurense* var. *inaense* (holotype).

類群とは認めがたい。偽茎と葉柄の色も、分類群の特徴とはならない。佐渡のヒロハテンナンショウ群の花序附属体が、他地域のものと比較して特に太いということもない。結局のところ、サドテンナンショウはヒロハテンナンショウから区別できない。

静岡・山梨県境の安倍峠の集団（表1の2）は、染色体が $2n=26$ （図1a）の2倍体であること、小葉が概して細いこと、花茎のかなり長い個体がまじることなどで特徴づけられる。しかし、この集団は普通のヒロハテンナンショウから形態的に見分けられない個体も多く含んでおり、分類群として区別することは困難である。杉本（1967）のアベテンナンショウ *A. robustum* var. *abense* は、この集団のうち特に葉が細い個体に対して与えられた名称である。安倍峠に限らず本州太平洋側や北九州の本種の集団は、本州中北部日本海側の集団に比べて小葉が細い傾向があるが、これはおそらくマイヅルソウ（河野ほか，1968）やツクバネソウ（河野ほか，1980）に見られる葉形の変異と同一の現象であろう。愛知県

茶臼山の集団（表1の6）も小葉が細く、染色体数は3株調べたところすべて $2n=39$ （図1b）の3倍体であったが、やはりヒロハテンナンショウに含まれるものと思われる。三重県藤原岳の集団（表1の7）も、形態の上からはヒロハテンナンショウと同定される。

一方、長野県白馬岳の大雪溪末端周辺の木林下に生育する集団（表1の15）は、ほとんどの個体が完全に融合した葯を持っている点で特異的である。仏焰苞は大部分の個体が紫色、染色体数は普通のヒロハテンナンショウと同様 $2n=52$ （図1c）である。しかし、この集団の中にも稀に（表1の資料では雄株23株中2株）葯の融合していない個体がある。また、少し南の針ノ木峠の集団（表1の14）では、完全に融合した葯を持つ個体の割合はずっと少くなり、14株中2株にすぎない。上高地岳沢の集団（表1の13）は全個体が多少なりとも葯の融合する傾向を示したが、全花で完全に融合しているものは見当らなかった。これらの集団は分類群として分化しつつあるが、まだ確立されるには至っていないのであろう。

アシウテンナンショウ *A. ovale* は、大形の黒紫色の仏焰苞と棍棒状の太い花序附属体で特徴づけられた種で、本州の北陸地方西部から近畿地方北部にかけて分布している。生育地はこの類としては比較的標高の低い場所まで広がっており、花期は4月下旬～6月上旬である。しかし、分布域の周辺ではヒロハテンナンショウとの間にどちらともつかない中間形があり、それとの差異は必ずしも明瞭ではない。ヒロハテンナンショウの中に、例えば秋田県森吉山産の標本（芹沢 29116 AICH）のように大形で黒紫色の仏焰苞を持つ個体があることから見て、

両者は種の階級で区別されるべきものとは思われない。

また、長野県駒ヶ根市しらび平の集団（表1の5）を構成する個体は、花茎が短いこと、仏焰苞筒部に隆起条があること、雄花の葯は紫色で融合しないこと、葉鞘はそれを除く葉柄部よりやや長いこと、小葉が全縁であることなどの点でヒロハテンナンショウに一致するが、仏焰苞や花序附属体の形態がかなり他のものと異なっている。仏焰苞筒部は長さ4.5–5.5 cm、口辺はやや広く開出し、多少耳垂状になる。舷部は五角状長卵形、長さ8–9 cm、幅3.5–4.5 cm、紫色であるが多数の縦白条が目立つ。花序附属体は長さ3–3.5 cm、太く短い円柱形で、先端はやや頭状になり、径7–9 mmある。小葉は5枚で葉軸はごく短く、球茎はよく子球をつける。花期は6月上～中旬である。イナヒロハテンナンショウ *var. inaense* (図2) と命名する。

以上をまとめてみると、ヒロハテンナンショウは一般に日本海要素の植物と考えられているが、その本来の分布域は2倍体、3倍体の産地から見て他の多くのテンナンショウ類が分布する太平洋側の山地であったと推定される。そして、この地域で残存的に細々と生活していたものが、染色体の倍数化と関連して日本海側に進出し、環境に適応的と思われる小葉の幅以外は大きな形態の変化のないまま、サハリンから朝鮮半島まで分布域を拡大したのであろう。そして、その後におそらくは低地、あるいは高山への生活域の拡大と関連して地域的な形態の変化が生じ、アシウテンナンショウや白馬岳の個体群で代表される地域集団が分化した、あるいは分化しつつあるのであろう。

II. シコクヒロハテンナンショウ群

2. *Arisaema longipedunculatum* M. HOTTA, Acta Phytotax. Geobot. 22: 95 (1966); OHASHI et J. MURATA, Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo III, 12: 296 (1980).—*Arisaema robustum* var. *shikoku-montanum* OHASHI, Sci. Rep. Tohoku Univ. IV, 29: 435 (1963).

Var. *longipedunculatum*

Hab. Honshu (Yamanashi and Shizuoka), Shikoku (Tokushima, Ehime and Kochi) and Kyushu (Miyazaki).

Var. *yakumontanum* SERIZAWA, var. nov.

A var. *longipedunculato* pedunculo longiore, spatha majore superiore quam folia tubo 3–5.5 cm longo lamina 4–7.5 cm longo, appendice spadiceis crassiore 3–7 mm diametro differt.

Hab. Kyushu. Pref. Kagoshima, Isl. Yakushima: near Takatsuka-goya, alt. 1340 m (*S. Serizawa* 31425–31434 June 8, 1980 AICH); between Takatsuka-goya and Mt. Miyanoura-dake, alt. ca. 1450 m (*S. Serizawa* 31439 June 9, 1980 AICH—holotype, fig. 3); *ibid.*, alt. 1350–1600 m (*S. Serizawa* 31437–31438, 31442–31443 AICH); between Shikanosawa and Nagata, alt. ca. 1450 m (*S. Serizawa* 31447–31450 June 10, 1980 AICH).

シコクヒロハテンナンショウ *A. longipedunculatum* は、はじめ大橋 (1963) により、ヒロハテンナンショウの変種として記載された。葉は通常1枚、稀に2枚、小葉は5枚で白斑はなく、葉縁は全縁または鋸歯縁、葉軸は短い。外側の側小葉はヒロハテンナンショウのように内側のものとほぼ同大のこともあるが、それより小さいこともある。葉鞘部は長さ2.5–3.5 cm、ほぼ直立し、葉柄全長の1/6～2/3を占め変異が著しいが、一般には半分よりやや短い程度のもが多い。葉鞘の口辺は斜めに切れ、通常拡がらない。花茎は葉鞘内の部分を除いて5–20

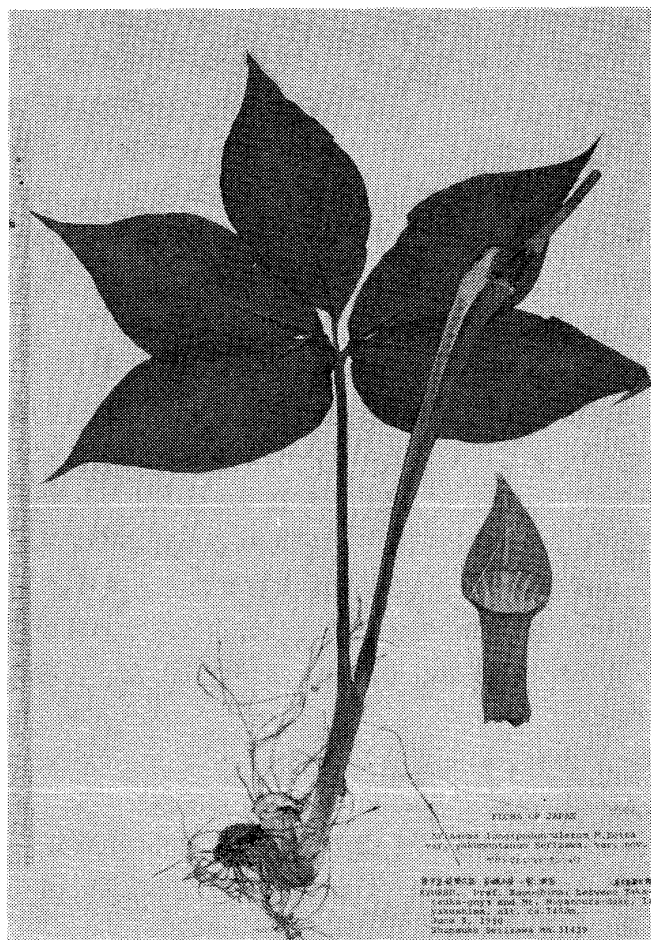


Fig. 3. *Arisaema longipedunculatum* var. *yakumontanum* (holotype).

数も $2n=28$ であった。つまり、この三ツ峠の集団は、シコクヒロハテンナンショウに含まれるものである。静岡県安倍峠 (表 1 の 3), 同井川東河内沢 (表 1 の 4), 宮崎県大崩山 (表 1 の 8), 同霧島山 (表 1 の 10) の 4 集団もシコクヒロハテンナンショウに含めてよいものと思われる。また、静岡県千頭山国有林産 (倉田悟 1052 TOFO) と宮崎県椎葉村霧立越産 (堀田満 10631 KYO) の標本も本種である。したがって本種の分布域は、本州中部と四国、九州の太平洋側の山地のブナ帯ということになる。生育地は通常林内であるが、四国ではしばしばやや開けた場所にも見られる。開花期はテンナンショウ属の中でも遅いほうで、6月上旬～7月上旬である。

本種は、このように分布域は広いが産地はとびとびで不連続であり、個体数も多いものではない。そこで、注意してみると産地ごとに多少形態的な差異が認められる。前述の記載は主として四国产の資料に基づくものであるが、三ツ峠のもの (表 1 の 1) は仏焰苞がやや大きく、しばしば紫色を帯び、舷部は幅広く、花序附属体も太くて先端で径 2.5–6 mm ある。安倍峠の集団 (表 1 の 3) は四国のものに似ており、仏焰苞は小型で花序附属体も細い。井川の集団 (表 1 の 4) は雄花の葯が紫色である。大崩山の集団 (表 1 の 8) は染色体数が $2n=56$ の 4 倍体であり、花期がやや早く、仏焰苞は細長くて筒部の長さ 4.5 cm, 舷部の長さ 7.5 cm に達する。しかし、これらの集団はあえて分類群として区別する必要はないものと思われる。

cm, 概して葉鞘部の短い個体では長く、長い個体では短い。仏焰苞は小さく、通常緑色、筒部は長さ 2–4 cm で隆起条はない。口辺は通常ごく狭く開出する。舷部は三角形～三角状長卵形、長さ 3.5–5.5 cm, 先端は鋭頭またはやや鋭尖頭である。雄花の葯は融合し、通常黄白色である。花序附属体は円柱状、先端は径 1.5–4 mm である。球茎はよく子球をつける。染色体数は $2n=28$ である。ヒロハテンナンショウからは花茎が長いこと、仏焰苞が小さいこと、苞の筒部に隆起条がないこと、雄花の葯が融合することなどで容易に区別できる。特に仏焰苞筒部の隆起条の有無は、識別の際よい手がかりになる。

本種ははじめ四国と山梨県三ツ峠産の標本に基づき記載されたものである。堀田 (1966) は *A. longipedunculatum* という学名を提唱した際、三ツ峠のものは染色体数が $2n=52$ であり、葯も融合していないとしてシコクヒロハテンナンショウから除外した。しかし、今回検討した三ツ峠産の資料 (表 1 の 1) はすべて仏焰苞に隆起条がなく、雄花の葯は融合していた。染色体

ところが鹿児島県屋久島の標高 1300–1600 m の山地に生ずる集団 (表 1 の 12) は、花茎が長く 7–32 cm あり、花は葉より高い位置につき、仏焰苞は大きく、筒部は長さ 3–5.5 cm, 舷部は卵形～三角状卵形で長さ 4–7.5 cm, 幅 2.5–3.8 cm, 花序附属体も太くて径 3–7 mm あり、他のものからの隔たりが著しい。葉は通常ほぼ同大の 5 小葉からなり、中央小葉は小さな株を除けば有柄、葉縁は全縁で鋸歯のあるものは見られない。花期は 5 月下旬～6 月上旬である。変種として区別し、ヤクシマヒロハテンナンショウ *var. yakumontanum* (図 3) と命名する。

ところで、本種とヒロハテンナンショウは堀田 (1966) が指摘したように相当異なるものであり、とても同一種とは考えられない。堀田 (1974) は本種からヒロハテンナンショウが分化したと推定しているが、両者の間にそのような直接的な類縁関係があることさえ疑わしい。染色体の基本数、仏焰苞筒部の隆起条の有無などで代表される両者の差は、本種と他のマムシグサ節の種、例えばユモトマムシグサやヒメテンナンショウとの差より著しいほどである。本種とヒロハテンナンショウは、おそらくマムシグサ節の中でも別の種群になるものであろう。

3. *Arisaema minamitanii* SERIZAWA, sp. nov.

Herba perennis, unifoliata. Tuber depresso-globosum, 1–5 cm diametro, haud proliferum. Cataphylla 3–4, inferne tubulosa, membranacea, intima longissima 10–30 cm longa. Petiolus inferne vaginatus; vagina tubulosa 12–30 cm longa ore dilatato, petiolo praeter vaginam 6–11 cm longo. Lamina pedatisecta, 5- vel 7-foliolulata; axibus lateralibus brevibus 0.3–4 cm longis; foliolis ellipticis vel anguste ellipticis apice acuminatis margine integris vel serratis basi cuneatis non variegatis; foliolo medio maximo 10.5–30 cm longo 3–12.5 cm lato sessili vel petiolulato, foliolis exterioribus plus minusve minoribus, foliolis extimis 6.5–16.5 cm longis 1.5–5 cm latis. Pedunculus 1–4 cm longus. Spatha viride, inferne tubulosa superne laminalis; tubo non angulosa 4–6 cm longo 1–2 cm lato ore dilatato, lamina ovata vel elongate ovata 6.5–10.5 cm longa 2.5–4.2 cm lata apice acuminata secus venas albo-striata. Spadix dioicus conoideus, mas 1–1.5 cm longus antheris purpureis non conatis, femineus ca. 1.5 cm longus. Appendix spadicis cylindrica 3–5 cm longa apice 2–7 mm diametro basi truncata; petiolo 0.3–1 cm longo sine stami-



Fig. 4. *Arisaema minamitanii* (holotype).

nodiiis.

Hab. Kyushu. Pref. Miyazaki: Mt. Wanitsuka-yama, Mimata-machi, alt. ca. 1000 m (*S. Serizawa* 24323 May 23, 1976 AICH—holotype, fig. 4); *ibid.* (*S. Serizawa* 24313, 24322, 24324-24330 AICH). Pref. Kagoshima: Mt. Inao-dake, Tashiro-machi, alt. ca. 750 m, cult. in Kariya (*S. Serizawa* 30910 April 21, 1980 AICH).

表1にあげた資料のうち、残りの宮崎県鰐塚山と鹿児島県稲尾岳の集団は、ヒロハテンナンショウともシコクヒロハテンナンショウとも異なるものである。鰐塚山の集団(表1の9)は次のような特徴を持つ個体からなる。葉は1枚、小葉は5枚または7枚で白斑はなく、葉縁は全縁または鋸歯縁、葉軸は短く通常1.5 cm以下であるが、長いものは4 cm程度になる。葉鞘部は斜上し、長さ12-30 cm、葉柄全長の2/3~3/4を占める。葉鞘の口辺は開出し、波状になる。花茎は短く、葉鞘内の部分を除いて1-4 cmである。仏焰苞は緑色、筒部は長さ4-6 cmで隆起条はなく、口辺は明瞭に開出するが耳垂状にはならない。舷部は卵形~長卵形、長さ6.5-10.5 cm、先端は鋭尖頭、下半部は脈に沿って半透明の白条が入る。雄花の葯は紫色で融合しない。花序附属体は円柱状、先端で径2-7 mmである。球茎は子球をつけない。山頂附近の主として沢沿いの林内に生じ、花期は5月中~下旬である。ヒュウガヒロハテンナンショウ *A. minamitanii* (図4)と命名する。稲尾岳の資料(表1の11)も、植栽品ではあるが同一種と判断される。

本種は南谷忠志氏により、1971年春に鰐塚山で発見されたものである。標本ではややヒロハテンナンショウに似ているが、葉は中央小葉が最大であること、葉縁に鋸歯のある個体が多いこと、仏焰苞筒部に隆起条がないこと、仏焰苞舷部先端は鋭尖頭になること、球茎は子球をつけないことなどにより識別できる。染色体数も異なる。両者はそれほど近縁なものとは思われない。むしろ、どちらかと言えばシコクヒロハテンナンショウに関係がありそうであるが、それとは花茎が短いこと、仏焰苞が大きく、白条が目立ち、舷部先端は鋭尖頭になること、雄花の葯が融合しないことなどの特徴で容易に区別される。

引用文献

- 堀田 満, 1966. 植物分類地理 22: 95-96.
 ———, 1974. 植物の進化生物学Ⅲ, 植物の分布と進化(三省堂) 291-292.
 河野昭一・井原正昭・鈴木昌友, 1968. 植物学雑誌 81: 473-490(欧文).
 河野昭一・長井幸雄・鈴木昌友, 1980. 植物地理・分類研究 27: 74-91.
 中井猛之進, 1935 a. 植物学雑誌 49: 432-424(欧文).
 ———, 1935 b. 植物学雑誌 49: 584(欧文).
 大橋広好, 1963. 東北大学理科報告 N, 29: 431-435(欧文).

抄録

原 松次: 北海道植物図鑑 上 B 5 272頁, 噴花湾社(室蘭市中央町3丁目7-15), 1981年4月発行。¥2,800.

北海道産植物をカラー写真で紹介したもので、上巻には488種がでている。各写真には簡単なノートと、撮影した場所と日が記録されている。学名が出ていないのはおしいが、今までに北海道に産することがはっきりしなかったものもかなりある。一読することをおすすめできる本である。

(村田 源)